

北海道釧路江南高等学校演劇部 第十三回校外展 上演作品

「また明日ね」

作 .. 山崎 健 (顧問)

潤色 .. 釧路江南高校演劇部

原田 紀子

斉藤 ひかる

泉 香代子

三輪 亜希子 (担任の先生)

北川 綾子 (保健の先生)

服部 昌一 (用務員)

木下 正晴 (テレビディレクター)

田舎の中学校の教室らしき学校の一室。

教室には先生用の机と生徒用の机すが三組しかない。女の子三人が話をしている。帰りの清掃中らしい。後片付けをしている三人の女子中学生。

ひかる 今日来てくれた、あの先輩さ、

香代子 ナナエさんでしょ。

ひかる ナナエさんでしょ。：香代子のイントネーション、変だよ。

香代子 そんなことないよ。

ひかる この前だって、タバタさんのことタバタさんって言ってたし。

香代子 え、いいじゃん。「タバタ」さんで。

ひかる 変だって。

香代子 変じゃないって。私は標準語だ。

ひかる 絶対違うから。ねえ、紀子。

紀子 (笑ってる) そうだね。

香代子 ええ？ 紀子もそう思うの？

紀子 少なくとも標準語じゃないよ。

香代子 おかしいなあ。

清掃を続ける三人。香代子、先生の机の上の地球儀に目が止まる。

香代子 インドネシアってアフリカにありそうな名前だよね。

ひかる また始まった。「インドネシア」って名前ですべてアフリカになんのよ。

香代子 え、だってほいじゃない。

ひかる ほいってねえ…。

香代子 え？ カンボジアってここにあるの？

ひかる どこにあるって思ってたの？

香代子 これこそアフリカだって思ってた。タイらへんなんだ。

ひかる 何？ 「タイらへん」って。：紀子、何とか言ってるよ。

紀子 (笑ってる) 誰にでも間違いはあるよ。

香代子 (地球儀を見ながら) モンゴルとベトナムって仲良しだよ。近そうだし。

ひかる 全然近くないし。

香代子 ネパールは、絶対ヨーロッパだって。

あきれられるひかると紀子。さらに続ける香代子。

香代子 この前知ったんだけどさ。
ひかる うん。
香代子 マーライオンってシンガポールだったんだよね。
紀子 そうだよ。
ひかる どこだって思ってたの？
香代子 絶対ヨーロッパだって思ってたのに。ショックう。
ひかる あんたの頭の中、覗いてみたいわ。

そこに用務員の服部さんがやってくる。なぜか手にはラジカセ。

ひかる あ、服部さん。
香代子 こんにちは。
服部 ちゃんと掃除やってるか？
ひかる もちろん。
紀子 ラジカセ持ってる。
ひかる それ持って、何するんですか？
服部 窓ふき。
香代子 踊りながらするんですか？
ひかる そんなわけないでしょ。
紀子 服部さん、雑巾は？
服部 ああ、それはこれから。
紀子 これから？
服部 で、掃除は終わったのか？
ひかる もう、バッチリですよ。
香代子 見てくださいよ、地球儀もきれいでしょ。

服部さん、窓の棧を指でなぞって。

服部 ホコリが付いてる。
ひかる そこまで見るんだ。
服部 当たり前だ。
香代子 きびしー。
服部 明日、テレビが来るんだろ。
香代子 そうだっけ？

ひかる あんた、先生の話、聞いてなかったの？

紀子 エゾ・テレビの人が来るって言ってなかったっけ？

服部 そうだぞ。この学校最後の日を撮ってくれるんだから。ちゃんと掃除するんだぞ。

三人 はい。

服部さんが去る。

紀子 服部さん、てさ…。

ひかる 何？

紀子 何か、正体不明って感じ。

香代子 まあねえ。

ひかる あんたは、脳みそ行方不明って感じでしょ。

香代子 何よ、それえ。

ひかる でもさあ、こんな田舎の学校に取材が来るなんてねえ。

香代子 カワイイ私が全国にさらされるなんて。

ひかる はあ？ 何言ってるの、あんた。

香代子 だってテレビ来たらしいじゃん。

ひかる うざいだけだって。どうせ、くだらないこと聞くだけだって。

香代子 芸能人みたいにうまく受け答えできないな、困っちゃう。

ひかる シナリオ通りにやったら大丈夫でしょ。

紀子 そんなこともないと思うけど。

ひかる どうせ、ローカルニュースなんだからさ。

紀子 それでもこの辺りに取材なんか来ないじゃない。

香代子 画期的だよ、これは。

ひかる 学校がなくなるなんて、もうありきたりのことでしょ？ ニュースにしてどうすんの。

紀子 帯広とか釧路でも小学校や中学校が統合してるんだって。

香代子 そうなんだ。

ひかる でも、こんな田舎の分校が今までよく持ったと思うわ。

亜希子先生がやって来る。

亜希子 どう？ 掃除終わった？

紀子 はい。終わりました。

亜希子　そう、ありがと。

ひかる　先生、明日ホントに取材に来るんですか？

亜希子　来るわよ。どうかした？

ひかる　いや、何人来るのかなって。

香代子　芸能人とか、来ないんですか？

亜希子　（笑って）来ないわよ。来るのは、三人。ディレクターさんとカメラさんと音声さん。

香代子　ギャラもらえますか？

ひかる　そんなわけないでしょ。

香代子　原稿、チェックさせてもらえますか？

紀子　原稿なんてないですよ。

亜希子　そうね。報道番組だし。

ひかる　芸能人でもないしね。

香代子　事務所通してもらえますか？

ひかる　あんた、話聞いている？。

香代子　これが芸能界デビューになるかも。

ひかる　ありえないでしょ。

紀子　香代子らしいね。

ひかる　先生、いつ来るんですか？

亜希子　実はね、

三人　え？

亜希子　もう来てるの。

三人　えーっ！

亜希子　ディレクターの方がお見えになって、あなたたちとお話したいって。

ひかる　何の話ですか？

亜希子　さあ。取材前の打ち合わせかしらね？　連れてくるからちよっと待っててね。

亜希子先生が出て行く。

ひかる　どんな人かな？

紀子　ディレクターって偉い人だよ。

香代子　イケメンかな？

ひかる　ひげ生やして威張ってるとか？

紀子　そうかな？

ひかる　かっこいい、おじ様だったりして？

紀子 サングラス、かけてそう。
香代子 身長は185センチで、体重78キロ。
ひかる 館ひろしみたいな人とか。
香代子 私のデビューが近付いてきたわ。
ひかる なんでそうなる？

亜希子先生が戻って来る。

亜希子 どうぞ、こちらです。

ディレクターの木下が入ってくる。

木下 どうも、木下です。
ひかる 若い。
木下 え？
ひかる 「ディレクター」が若い人だっと思って思わなかったんで。
木下 みんな中学生だから、なじめるかなって思ったんだけど。
香代子 何か権力なさそう。
ひかる 弱そうだよね。
香代子 デビューが遠のいたわ。
亜希子 ひかる、香代子。(木下に) すみません。
紀子 あ、でもディレクターさんて言うだけあって、頭よさそうだし。
亜希子 そうそう。
紀子 メガネもお似合いです。
木下 ありがとうございます。でも、いいんですよ。素直に言ってくれて。
亜希子 すみません。こんな子たちですけど、よろしくお願いします。
木下 いえいえ。じゃ、後は勝手に話させていただくんで。
亜希子 そうですか？ じゃ、私仕事がありますので。
木下 ええ、どうぞお構いなく。

亜希子先生が去る。

ひかる こんな子たちって、香代子と私たちを一緒にしないでほしいよね。
紀子 (笑って) そうね。
香代子 なによ。

木下 元気だね、みんな。改めまして、エゾテレビの木下です。
ひかる 斉藤ひかるです。
香代子 泉香代子です。
紀子 原田紀子です。
木下 よろしく。
ひかる お話って何ですか？
香代子 ギャラの話ですか？
木下 いや、そういう話じゃなくて。
香代子 私をデビューさせてくれるとか。
ひかる まだ言ってる。
木下 今日から三日間、カメラが回っていても普段のママでいてほしいんだ。
ひかる どうして？
木下 ありのままの姿を写しておきたいんだ。ドキュメンタリーだから。
香代子 ふーん。
ひかる あんた、ドキュメンタリーの意味、わかってるの？
香代子 あんた、馬鹿にしてない？
紀子 (笑いながら) 知ってるよね。
香代子 もちろん！
木下 まあまあ。カメラはできる限りみんなの邪魔にならないように撮影するから、協力してくれないかな？
香代子 別にねえ。
ひかる いいけどねえ。
紀子 …あの、私たちだけでなく、先生方もとるんですか？
木下 そうだね。この学校最後の日の記録だから。君たちと先生のやり取りなんか残せたらいいんだけどね。
香代子 そうかなあ？ それより私に芸能界への道を…
ひかる (さえぎって) でも、いいんじゃない。先生方もこの学校がなくなったらこの町から出てくんだし。お互いの思い出として。
紀子 …放送したら、それ、いただけるんですか？ DVDとか。
木下 どうしてもっていうなら、さしあげます。ディレクターの権限で。
香代子 お、かっこいい。
ひかる ちゃかさないの。
紀子 (木下に) ありがとうございます。
ひかる 珍しいね。
紀子 え？

ひかる 紀子がそんなにはっきりもの言うの。

香代子 確かにね。

紀子 そうかな？

ひかる そうだって。

木下 皆さん協力してくれると言うことで、ありがとう。じゃ、早速聞いていい？

ひかる 早いですね。

香代子 もう、撮るんですか？ じゃあ、ちゃんとしなくちゃ。

木下 いや、改めてちゃんと聞くんだけど、とりあえずみんなとお友達になろうと

思っ

香代子 友達になるとデビューできます？

ひかる また、あんたは。

木下 (笑って) どうだろうね。

香代子 何もなし？

紀子 まあ、いいじゃない。

木下 とりあえず、今の気持ちを聞きたいな。この学校、どう思う？

ひかる ちっちゃいよね。

香代子 ちっちゃいというか、かわいい？

紀子 そうだね。かわいいって思う。

香代子 教室三つだから、一人ひとつって感じだよな。

紀子 そうそう。

ひかる (同時に) それ、当たり前すぎる。

紀子 それなのに、ひとつの教室で三人で過ごしたから、余計かわいいって思うん

だ。

香代子 でもさ、よく今まで続いたなあって。

ひかる いつ潰れてもしようがないって、思ってたし。

紀子 私たちが卒業するの待ってくれていたのかな。

ひかる そう思うと粋な計らいだよな。

木下 愛着もひとしおってやつだね。

香代子 ひと塩って、何か食べるの？

木下 え？

香代子 だから、塩をふって何か食べるのかなって。

ひかる あー、なんでもありません。続けてください。

木下 …？ 思い出の場所なんかあるのかな？

ひかる やっぱ、教室かな。三人でずっと一緒だったし。楽しい思い出がたくさんあるし。

香代子 私は保健室。

木下 どうして？ 珍しいね。

ひかる うん。初めて聞いた。

香代子 保健の綾子先生、クールだけど面白いし、いろんな話したし。結構思い出ある。

紀子 私も教室かな。先生、生真面目なだけじゃなく、優しかったし。

ひかる 私、亜希子先生、苦手だな。

香代子 あんたはそうだよね。

ひかる もちろん、感謝してるよ。でも、ちよっとうるさいって言うか、まじめ過ぎって言うか。

香代子 それがいいんじゃない。

紀子 私、ホント感謝してるんだ。ここに来て、亜希子先生に出会えて。

亜希子先生がやってくる。

香代子 お、噂をすれば。

亜希子 何？ …そろそろ下校時間だから。

三人 ハーイ。

亜希子 (木下に) すいません、まだお話中の所を…。

木下 いえ、いいんです。…いい子たちですね。

亜希子 そうですか？ 私も含めてずっと一緒だったので、なんか馴れ合っちゃって。

ほかの人に失礼なことがないかって。

木下 そんなことはありませんよ。

香代子 ほらあ、先生。

ひかる 私たちだって礼儀くらいわきまえていますよ。

紀子 そうですよ、先生。

亜希子 なら、いいんだけど。

三人が帰り支度を始める。

木下 ありがとうございます。先生にも後でお話を伺ってよろしいですか？

亜希子 あら、何かしら？

木下 先生の思い出も伺っておきたいなって。

亜希子 どうぞ。こちらこそよろしく願います。

チャイムが鳴る。

ひかる あ、チャイムなった。

香代子 もう行かないとね。

紀子 じゃ、私たち、帰ります。

亜希子 また明日ね。

三人 さようなら。

三人が出ていく。

木下 明日は、卒業式の準備ですね。

亜希子 ええ、その後の閉校式の準備もあるんです。

木下 大変ですね。

亜希子 仕事ですから。

木下 でも、それだけじゃないですよ。

亜希子 え？

木下 いや、あの子たちと過ごした三年間って、先生にも特別なものがあるんじゃないかって。

亜希子 それは、まあ、ねえ。

木下 そのあたりの話を明日にでも。

亜希子 はあ。

木下 では、また明日、よろしくお願いします。

亜希子 こちらこそ、どうぞよろしく。

木下、教室を出ていく。

亜希子、それを見送る。場面転換。

2

ひかると紀子が入ってくる。ひかる、黒板の字を直して「明日は卒業式」に書き換える。

少し遅れて香代子が走って来る。

木下がやって来て撮影の合図をする。

明かりが変わって紀子一人が立っている。

紀子

私は、学校の先生になっていますか？

明かりが消える。再び明かりがつくとひかるが立っている。

ひかる　私は、人の役に立つ仕事をしていますか？

明かりが消える。再び明かりがつくと香代子が立っている。

香代子　私は、かわいいお嫁さんになっていきますか？

明かりが消える。再び明かりがつくと服部さんが立っている。

服部　窓、きれいになってますか？

木下　カットカットカット！！

三人の声　ええ？

明かりがつく。教室の中でカメラに向かって立っている服部。

紀子・香代子・ひかる・木下がいる。

木下　（服部に）すみません。何なさってるんですか？

服部　いや、窓を拭きに。

木下　はあ？

ひかる　服部さんは、この学校の用務員さんです。

香代子　とっっても働き者で…。

紀子　いつも学校をキレイにしてくれるんです。

木下　で、その服部さんが何でコメントを？　これ、「大人になった自分」へのメッセージなのに。

服部　いや、自分も「未来の自分」に向けてメッセージをと思ひまして。

木下　わかりました。あなたのコメントは後から別にいただきますから。

服部　そうですか？（ちょっと残念そう）

木下　ええ。

服部　わかりました。

服部が去る。見送る四人。

木下　（服部出ていくのを確認して）なんか正体不明って感じだね。

紀子　ええ。

香代子　でも、本当に働きものなんですよ。

木下　今撮ったのは、タイムカプセルみたいなもので、君たちが大人になった時に見てほしいんだ。

ひかる　映像のタイムカプセルかあ。

香代子　カッコいい！

紀子　でも、みんな十年後にどうなってるんだろうね。

香代子　私は、早くお嫁さんになりたいな。

ひかる　さっきはあんなこと言ったけど、私なんも決まってるないんだよね。

紀子　そのうち見つかるって。

木下　紀子ちゃんは学校の先生になるのが夢なんだ。

紀子　ええ、まあ。

香代子　紀子は頭いいしねえ。

ひかる　私たちとは出来が違うって感じ。

紀子　そんなことないよ。

木下　中学校からこっちだっけ。

紀子　誰から聞いたんですか？

木下　さっき先生から。

紀子　そうですか。…父の仕事の都合でこっちに来たから。

ひかる　でも、ホント紀子は偉いよねえ。ちゃんと勉強して、将来の目標も持って。

香代子　江陵に行つて、大学にも行つて、

ひかる　将来は学校の先生かあ。

香代子　私の子供を教えることになったりして。

ひかる　亜希子先生みたいに、まじめな先生になってるかもよ。

香代子　「静かにしなさい。ホント、お母さんとそっくりね」て言われたりして。

ひかる　そうそう。

木下　亜希子先生って、そんな感じなんだ。

紀子　そんなことないですよ。厳しいときは厳しいけど。

ひかる　だって、わたしなんか怒られてばっかだよ。

香代子　それは、あんたがうるさいからでしょ。

ひかる　あんただって、ボケかまして突っ込まれてたでしょ。

香代子　わたしはボケてない。普通にしてただけよ。

木下　でも、先生のことは好きなんですよ。

ひかる　そりゃ、三年間ずっと一緒だったし。

香代子　いろいろ面倒見てもらったし。

紀子 勉強も教えてもらったし。

香代子 紀子は大変だったよね。江陵行くことに決めてからは。

ひかる 放課後も先生につきっきりで勉強教えてもらって。

香代子 わたし、もう勉強はいいや。高校も農業だし。

木下 高校は三人バラバラ？

ひかる 私は湖南高校。大学はそこだとちよつと厳しいかな。

木下 湖南高校でも大学行ってる人はいるでしょ？

ひかる いるけど、江陵に比べればねえ。

香代子 だから紀子は偉いなって。

ひかる 進路もなんとなく決めちゃったし。

香代子 私も近いつてだけで決めまし。

ひかる その先のこともわかんないし。

紀子 私だって、なりたいて言ってるだけだし。

ひかる でも、紀子みたいには出来ないよ。

紀子 いや、私も必死だったから。

ひかる 毎日先生にわかんないとこ教えてもらって。

香代子 放課後は紀子の勉強時間で感じだったよね。

ひかる なんか先生とられたって感じ。

紀子 そんなつもりじゃ…。

香代子 だから、それだけ頑張ったってこと。

ひかる 頭いい子があんなだけ勉強すれば、そりゃ江陵も受かるわ。

香代子 ひかる？

紀子 だから、そういうことじゃ…。

ひかる 大学行って、先生になって、いつかは亜希子先生と一緒にの学校で？

木下 どうしたの、ひかるちゃん？

ひかる いいよねえ、夢があって。

紀子 そんなんじゃないって！

紀子が大声を出したので驚く三人。

木下 まあ、落ち着いて。

ひかる 何が違うっての？ いつも先生、先生って。

紀子 だから、それは…。

ひかる あんただけの先生じゃないでしょ。

木下 まあ、いいじゃないか。

ひかる 何がですか？
みんな、受験勉強大変だったんだから。
香代子 私も大変でした。
木下 …先生も、紀子ちゃんにはその必要があったってことで。
ひかる そんなのわかってます。でも…。
木下 でも？
ひかる ちよっと納得いかないんで。

そこへ、亜希子先生がやってくる。

亜希子 どうしたの？
ひかる いえ、何でもありません。
紀子 …将来について話してたんです。
香代子 私は、お嫁さんになりたいなああって。
亜希子 ふーん。…（木下に）ああ、「大人になった自分へ」でしたっけ。
木下 ええ、そうです。
亜希子 昔はそういうのはタイムカプセルだったんですけどね。
木下 今はDVDで簡単に残せますからね。
亜希子 ありがとうございます。
木下 え？
亜希子 いや、そんなことまで気を遣ってもらって。
木下 いいんです。これも番組の企画ですから。
亜希子 そうなんですか？
木下 はい。
紀子 …先生、始めるんですか？
亜希子 そうそう。まだ時間あるけど、ちよっと確認することもあるから体育館へって、校長先生が。
三人 ハーイ。（と出て行く）
亜希子 （木下に）どうぞ予行もご覧になってください。撮影の参考になるでしょうし。
木下 ありがとうございます。

音楽が鳴る。

亜希子 あれ、もうCDかけてる。

木下 何ですか？

亜希子 式の前のBGM。校長先生、気が早いから。

木下 そうなんですか。

亜希子 もう始まりますよ。

二人、教室を出て行く。場転明かり。

3

ひかると香代子が教室に帰ってくる。落ち着かない様子。

明かりがつくと、二時間ほど後の教室。亜希子先生とひかると香代子がいる。

不安げな様子の三人。

香代子 紀子、大丈夫かな？

亜希子 心配ないって。

そこへ保健の北川綾子先生が入ってくる。

亜希子 北川先生、紀子、どうですか？

綾子 心配ないよ。ただの立ちくらみ。

亜希子 そう、良かったわ。

香代子 先生、本当？ 本当にもういいの？

ひかる 打ち所悪かったとか、ないんですか？

綾子 大丈夫。そんなんだったら、とっくに救急車呼んでるわよ。

ひかる だいたい予行が長すぎ。

香代子 私、肩こっちゃったわ。

亜希子 しょうがないでしょう。いつもの卒業式と違って、閉校式もあるんだから。

ひかる だからって二時間もやるなんて。

香代子 ねえ。

綾子 でも、紀子もちょっと緊張してたのかな？ 表情硬かったし。

香代子 それは…。

亜希子 やっぱり、何かあったのね？

ひかる わかるんですか？

亜希子 そりゃ、わかるわよ。付き合い長いから。

ひかる ごめんなさい。

亜希子 何が？

ひかる　　ちよつと、紀子にきついこと言っちゃって。

綾子　　どんなこと？

ひかる　　それは…。(言いづらい) 先生が紀子に付きっ切りだったって。

香代子　　先生とられたみたいだって。

ひかる　　香代子。

亜希子　　そうか…ごめんね、二人とも。

ひかる・香代子　　え？

亜希子　　紀子、どうしても江陵行きたいっていうから、時間かけないといけなくて。

綾子　　紀子も頑張ったもんね。

ひかる　　それはわかってただけど。

香代子　　ちよつと、ジェラシーって言うか。

綾子　　そうか。でも、嫉妬は醜いよ。

香代子　　え。

綾子　　あんたたちも、紀子も受験に向けて頑張った。三人とも進路が決まった。それでもいいじゃない。

ひかる・香代子　　はあ。

綾子　　紀子はそれで、疲れがたまってた。今日それが出た。

亜希子　　それ、強引過ぎない？

綾子　　で、今日は立ちくらみ。OK？

ひかる・香代子　　はい。

綾子　　まあ、紀子は休ませたほうがいいかも。今日はもう何もなし。ちよつと良
いんじゃない？

亜希子　　そうね。二人とも、先帰っていいわよ。

ひかる・香代子　　ハイ。

ひかる・香代子、帰り支度を始める。

ひかる　　綾子先生、保健室行って、紀子に謝ってもいいですか？

綾子　　いいけど、長居はダメよ。寝てたらそつとしておいて。

ひかる　　ハイ。

香代子　　わかってますって。

ひかる　　さようならあ。

亜希子　　また明日ね。

ひかる・香代子　　はあい。

ひかる・香代子、かばんを持って去る。

亜希子 (二人が出て行ったのを見届けて) 綾ちゃん、ごめんね。

綾子 何が？ 紀子のことならいいって。それが仕事なんだし。

亜希子 それもあるけどさ。

綾子 何よ、遠慮しちゃって。長い付き合いじゃない。

亜希子 紀子って何考えてるかわかんないとこあるからさ。

綾子 まあ、そうだね。

亜希子 結構無理したり、我慢して言いたいことも言わないのになって。

綾子 そうでもないって。

亜希子 そうかなあ？

綾子 でも、びっくりしたよね。予行が終わって立ち上がったと思ったら、バター

ンって。

亜希子 本当に。

綾子 服部さんに抱えてもらって保健室行っただけ。

亜希子 服部さん、どこからともなく現れたよね。

綾子 ホント、不思議な人。(笑) まあ、よかったよ。大したことなくて。紀子、横

になったらすぐに目きましたし。

亜希子 そう。

綾子 ちょっと頭が重いって言うから寝かし付けといた。

亜希子 ありがとう。

間。

綾子 …あの子たちともお別れだね。

亜希子 そうね。

綾子 あの子たち、変わったよ。この三年間で。

亜希子 そうかな。

綾子 大人になったと思うもの。

亜希子 まだ十五だよ。

綾子 そりゃそうだけども、でもやっぱり大人びてきたよ。

亜希子 そうかなあ。

綾子 毎日顔合わせてるから、わかんないんだって。

亜希子 そう？

綾子 そうだよ。それもあんたが担任だったから。

亜希子　そんなにチカラないよ、わたし。

木下、そうっと教室にやってくる。

木下　あの。

亜希子　あ、どうぞ。

木下　すいません。

綾子　どうしたんですか？

木下　さつき、動揺しちゃって。

亜希子　ああ、気にしないでください。よくあることですから。

木下　（驚いて）よくあるんですか？

亜希子　大きな学校だったら、子供も多いし。

綾子　長時間の集会でもたない生徒は多いですよ。

木下　そうなんですか。：紀子ちゃん、大丈夫ですか？

綾子　ちよっとした立ちくらみだから、心配ないわよ。

木下　そうですか。

亜希子　でも、木下さんも大変ですよね。

木下　え？

亜希子　こんな田舎の学校の取材なんて。

木下　いいえ。そんなことないです。

綾子　そう？　ニュースにする意味ないんじゃないの？　学校の統廃合なんか当た

り前だし。

木下　だから、大事だと思うんです。

綾子　何が？

木下　地域社会の崩壊ってずっと言われてるじゃないですか。

綾子　はあ。

木下　学校の統廃合ってその象徴のような気がするんです。歴史ある学校がなくな

るってことを伝えることで、問題提起しなきゃって思うんです。

綾子　なんか固いのねえ。

亜希子　ホント。私たちにしてみれば、新しい学校に転勤するってだけなのに。

綾子　そうよねえ。

木下　（驚いて）そうなんですか？

亜希子　もちろん、思い入れはありますよ。あの子たちとは三年間一緒だった。可愛

くないわけがないですから。

綾子　それなりに苦労したもんね。

亜希子 だけど、この仕事はここだけで終わらないし。次の学校と子供たちが待って
ますから。

木下 でも、この学校で育った人たちは、思い入れがあると思うんです。

綾子 と、言いますと？

木下 昨日も、地域の人たちにお話を聞きました。

亜希子 そうなんだ。で、なんて言っていました？

木下 「学校がなくなると、地域のまとまりがなくなる」とか「自分の体の一部が
なくなるようだ」とか、皆さん本当に名残惜しい様子で。

亜希子 そうね。

綾子 その気持ちはわかる気がする。

木下 「できれば残しておいてほしい」と言うおじいちゃんもいて。

亜希子 でも、校舎は残しておくですよ。

綾子 公民館みたいな感じだね。

木下 でも、「いつでも来たい場所だ」っておっしゃる方もいたんですけど。それは
もちろん学校としてってことで。

亜希子 うーん。

木下 そんな場所だから、先生にもいろいろお話を伺っておきたいなって。

亜希子 え、取材なの？ 今、カメラ回ってるの？

綾子 どこどこ？

木下 いえ、大丈夫です。先生のコメントは卒業式の後たっぷりいただきます。
今はまず、お近づきになるということ。

綾子 なあんだ。じゃ、私、紀子の様子を見てくるから。

亜希子 よろしくね。

木下 北川先生も後でお話聞かせてください。

綾子 ハイハイ。保健室でね。

綾子先生、保健室へ戻る。

亜希子 で、何かからお話しましょうか。

木下 改まって構えられると困るんですけど。

亜希子 どうして？

木下 さつきみたいな本音のお話を伺いたくって。

亜希子 ああ。でもあれ以上でも以下でもないです。

木下 そうなんですか？

亜希子 生徒への愛情を人に語れるのが立派な先生なんでしょうけど、私はそういう

のは苦手なんです。

木下

はあ。

亜希子 だって、私も子供たちもいつかは学校という場所を離れていくわけですから。子供たちはそこからの人生のほうが長いし。

木下

そうですね。

亜希子 じゃあ、今の私にできることって、何だろうって。そう思っているだけなんです。

木下

何なんですか？ できることって。

亜希子

さあ、何かしら。

木下

え？

亜希子

そんな簡単に答えが出るほど、偉くないですよ、私。

木下

答えが出たら教えてくださいませんか？

亜希子

(笑いながら) 出たら、ね。：他の先生方への取材はいいんですか。

木下

そうですね、職員室にもう一度よって見ます。さっき迷惑かけちゃったし。

亜希子

：騒ぎすぎでしたね、ぼく。

木下

なれてないと、そんなもんですよ。

亜希子

：度胸が据わっているんですね。

木下

教師になった頃の私は、さっきの木下さんと大して代わらなかつたですよ。

木下

そうなんですか？

亜希子

そうですね。

木下

ちよっと安心しました。また後でお願いします。

木下、出て行く。入れ替わりに紀子が服部さんと綾子先生に連れられて戻ってくる。

服部さんが作ったと思われる不思議な車椅子に紀子が乗っている。

紀子

服部さん、大丈夫だって。

服部

いや、一応、用心しないと。

綾子

大きな声出したら、また倒れるわよ。

亜希子

大丈夫？

紀子

大丈夫ですって。

服部

女の子は、体を大事にしないと。

紀子

だからって、車椅子は(大げさです)。

服部

いいから。座ってなさい。

綾子

きかないのよ、服部さん。

紀子

平気です。頭もすっきりしています。

亜希子　そう。服部さん、おろしてあげて。
服部　はい。

紀子　ありがとうございます、服部さん。

亜希子　ホント、迷惑かけたわね。

服部　いえ、これも仕事のうちですから。

綾子　いや、それは私の仕事かな？

亜希子　車椅子、作るのも？

服部　もちろん。

亜希子　いつ作ったんですか？

服部　さっき。予行のあとで。

綾子　早っ。

亜希子　早いですね。

服部　ええ、まあ。

亜希子　ありがとうございます。気遣ってもらって。

服部　いえいえ。じゃ、窓拭いてきます。

亜希子・綾子・紀子　？

服部さん、出て行く。

綾子　もう拭く窓ないんじゃない？

亜希子　町中の窓拭く気かしら？

綾子　そうかも？

亜希子　紀子、服部さんも心配してくれてるんだから。

紀子　わかってます。

亜希子　ならいいけど。あ、ひかると香代子が行ったでしょ。

紀子　いえ、気づきませんでした。

亜希子　そう。なんか謝りたいって言ってたから、明日仲直りしてね。

紀子　そうですか。

亜希子　明日でお別れだしね。後味悪いままじゃね。

紀子　そうですね。

綾子　高校、別々だもんね。

亜希子　紀子は進学考えてるから。

綾子　そうか。

紀子　でも、私の力で通用するかな。

亜希子　大丈夫だよ。あんなに頑張ったんだもの。

綾子　　そうだよ。

紀子　　だといいですけど。

亜希子　　さあ、明日に備えて体を休めておかないと。何なら送っていいんか？

綾子　　車を出すのはちょっとまずいんじゃない？

亜希子　　そうか。そうだよね。

綾子　　まあ、卒業式を前に積もる話もあるだろうし、少しここで亜希子先生とお話

してから帰ったら。

紀子　　はい。

亜希子　　何？　積もる話って？

綾子　　深い意味はないって。

亜希子　　そう？

綾子　　（紀子に）じゃ、無理しないでね。

紀子　　はい。

綾子、教室から出て行く。

亜希子　　紀子、頭が重いのは、もういいのね？

紀子　　はい。

亜希子　　じゃ、早く帰って明日の卒業式に備えないと。

紀子　　そうですね。

帰る支度をしようとする紀子。しかし、すぐに手を止める。

紀子　　先生、あのね。

亜希子　　何？

紀子　　私、人と話すの、苦手だったんだ。

亜希子　　そうだね。

紀子　　でも、この分校入って、先生に出会って、ひかるや香代子と一緒にになって。

亜希子　　うん。

紀子　　先生がいろんな話をしてくれて。

亜希子　　うん。

紀子　　それだけじゃなくて、私の話も時間をかけて聞いてくれて。

亜希子　　当たり前のことをしただけよ。

紀子　　でも、本当うれしかったんだ。

間。

紀子 私、高校行ったら、うまくやっていけるかな？

亜希子 大丈夫よ。

紀子 本当にそう思う？

亜希子 大丈夫だって。

紀子 だって、先生もいないし。ひかるも香代子もないんだよ。

亜希子 でも、将来大学に行きたいって思うんだったら。

紀子 それはわかってるよ。わかってるんだけど…。

間。

紀子 ずっとみんなと一緒にいたいって、思ってた。

亜希子 それができればね。

紀子 ここを卒業しても、先生がいて、ひかるがいて、香代子がいて。

亜希子 会えるわよ、いつだって。

紀子 ううん、そんなことじゃないの。いつまでも、今までみたいになって。これまでもずっとそうだったみたいに、これからもって。

間。

亜希子 紀子。

紀子 はい。

亜希子 「一期一会」ってわかる？

紀子 ええ。

亜希子 出会いはいつも、一生に一度。だからその出会いを大切にしなければいけないの。

紀子 でも、その出会いがいいものじゃないかも知れないですよね。

亜希子 それはどうなるか、わからないじゃない。

紀子 それはそうだけど…。

亜希子 だから頑張るんじゃない。

間。

紀子 わたし、ここを出たって新しい場所に行っても、今より良くなるなんて思え

ない。

亜希子

紀子。

みんなと一緒にいたいなって。いつもバカやって、一緒に笑って、先生から褒められたり怒られたりして、ずっとそうして…。

亜希子

紀子、どうしたの（たしなめる）。

紀子 …先生とずっといたいなって。先生とこれからも、…まだいろいろと教えてほしいって。

間。

紀子

だから、（と何か言おうとする）

亜希子

（さえぎって）さっき木下さんにも言ったんだけど。

紀子

何をですか？

亜希子

私もあなたたちもこの学校を離れていくんだって。

紀子

ええ。

亜希子

あなたたちはこの学校を出てからの人生のほうが長いって。

紀子

…。

亜希子

だから、ここにいたことを、紀子もひかるも香代子もこの先の生活で生かしてほしいって思っている。

紀子

先生は？ この学校を出たら。

亜希子

私は行く先々の学校でできることをするしかないって、そう思ってる。それが私の仕事、というか、役割。

紀子

先生、次の学校決まってるんですか？

亜希子

まだ確定じゃない。だから教えられない。

紀子

そうなんだ。

亜希子

私だって、ここから先の人生のほうが長いわよ。あなたたちには負けるけど。

紀子

人生80年時代なんだから。…ちよつと古いか。

亜希子

（笑って）そうですね。

紀子

やっと笑ったね。

亜希子

あ…。

紀子

あなたはそうやって笑っているのが一番よ。

亜希子

はい。

紀子

今日はもう帰んなさい。明日、また倒れたら、それこそ式どころか、せつ

か

紀子

のテレビも台無しだからね。さっきはすいませんでした。

亜希子 いいのよ、それも私たちの仕事だから。

紀子 じゃ、失礼します。

亜希子 また明日ね。

紀子 はい。

紀子、カバンをもって出て行く。

それを見送る亜希子先生。誰もいない教室を一通り眺める。

そこへ綾子先生がやって来る。

綾子 亜希子先生：もう帰った？ 紀子。

亜希子 さつきね。

綾子 ふう、「先生」つけて呼ぶの疲れるわ。

亜希子 お互いさまよ。

綾子 そうだけどね。結構私も気遣ってんだよ。

亜希子 (笑って) そうなの？ そんな風に見えないんだけど。

綾子 同期で初任者研修が一緒だったと思ったら、こんなところで同僚になって。

亜希子 こんなとこって。

綾子 ま、だから心強かったけど。

亜希子 それもお互いさまね。

綾子 そうよお。だから私に感謝しなさいって。

亜希子 ハイハイ。

綾子 で、何だって？

亜希子 いつもみんなといて楽しかったって。

綾子 それで？

亜希子 みんなと一緒にいて話ができるようになってうれしかったって。

綾子 それだけ？

亜希子 高校行ってもうまくやっていけるかなって。よくある心配事。

綾子 それから？

亜希子 何？

綾子 いや、だから、あんまりあなたが冷たく突き放すと、あの子また不安定にな

っちゃうんじゃないかって。

亜希子 まさか。

綾子 あんたのクールさはおっきい学校ではいいんだけどね。

亜希子 何よ。

綾子 時として本気ですがってってくる子供には、とりつく島がないかもね。ここは田

亜希子 舍だし、生徒は三人だし。いやでも生徒と近くなるし。そうね。

綾子 だから、突拍子もないことをあの子が言っても、受け止めてあげてほしいなあって。

亜希子 (動揺して) そう、そうね。

綾子 (その様子を見て) あ、余り気にしないでもいいよ。

亜希子 あ、うん。

綾子 じゃ、私、保健室片付けないと。3月一杯で空にしないといけないしね。

亜希子 そうだね。

綾子先生、教室を出て行く。考え事をする亜希子先生。

木下がやって来る。

木下 三輪先生。

亜希子 ああ、はい。

木下 今日はどうもありがとうございました。明日の本番、よろしくお願いします。

亜希子 本番って、テレビじゃないんだから。

木下 そうですね。つい、くせで。∴先生は北海道の出身ですか？

亜希子 いえ、東京です。北海道の大学に来て、そのままこっちで教員に。∴それが何か？

木下 いえ、ボクは釧路なんですけど、僕の出た中学校も統合でなくなっちゃって。

亜希子 そうなんですか。

木下 自分のいた場所がなくなるって寂しいですよ。

亜希子 そうですね。

木下 だから、今回、こちらの分校を取材させてもらってるんです。

亜希子 そうだったんですか。

チャイムがなる。

亜希子 今日も終わりかあ。

木下 すいません、勝手なこと言って。では、また明日、よろしく願います。

亜希子 こちらこそ、よろしく。

チャイムがなる中、木下が教室を出て行く。場転明かり。

翌朝の教室。場転明かりの中、香代子が登校してくる。黒板の字を直す。「今日は卒業式」

ひかるが入ってくる。紀子がやや遅れて入ってくる。

生徒が揃って椅子に座り、待機している。

亜希子先生は来ていない。綾子先生がやって来る。

ひかる 綾子先生。

香代子 亜希子先生は？

綾子 うん、大丈夫。ちょっと遅刻するだけだから。

香代子 こんな大事な日に何やってるんだらうね。

ひかる ホント、らしくないよね。

香代子 紀子、先生、昨日何か言ってた？

紀子 え？

ひかる だから、あんた帰る時、何か言っていなかった？

紀子 何で私？

香代子 昨日最後に会ったの紀子でしょ。私たち先帰ったんだし。

紀子 あ、そうか。

ひかる 昨日のこと、気にしてたのかな？

香代子 心配して夜遅くなって、寝坊した？

紀子 昨日のこと？

ひかる ほら、私たち、やりあったじゃない。

香代子 あんなにむきになる紀子、初めて見たよ。

紀子 そのこと？

綾子 昨日の話ね。

紀子 先生、知ってるんですか？

綾子 この子たちから聞いた。(ひかるに)ちゃんと謝ったの？

ひかる それは、まだ…。

綾子 まだ引きずってんの？

ひかる そんなことないです。

紀子 ひかる、ごめんね。

ひかる (驚いて) 何が？

紀子 ひかるや香代子の気持ち考えないで。

ひかる こっちこそ、ねえ。

香代子 あのね、ひかるったら、昨日、帰りに「あー、私、何かやなヤツだった」なんて。

ひかる　ちよっと。
香代子　「どうやって謝ったらいい？」なんて言ったりして。
ひかる　それ、誰だよ。
綾子　（ひかるに）あんたもわかりやすいね。
ひかる　これ、私じゃないです。
綾子　ハイ、謝る。
ひかる　…紀子、ごめん。昨日は、言い過ぎた。
紀子　いいよ。
ひかる　ホントに？
紀子　本当に。
ひかる　そう？　ありがとう。
綾子　ハイ、握手。

紀子とひかる、握手。

綾子　ヨシ。それにしても遅いな。
香代子　紀子、先生、本当に何も言っていなかった？
ひかる　「もう疲れたー」とか、
香代子　「三年間大変だったー」とか。
紀子　何言ってるのよ。
香代子　私たち三人と付き合い合った三年間の疲れがどっと出て…。
ひかる　今日はもういいかなくなって気になったとか。
綾子　そんなことあるわけないでしょ。
綾子　あんたたちと付き合い合っただけで疲れたってのはそうかもよ。三人とも先生に迷惑かけてばっかだったでしょ。
紀子　先生。
綾子　今までのこと考えたら、今日一日くらいちょっと遅れたって文句言えないでしょう。
ひかる　何がですか？
綾子　ひかるは、授業中うるさくって、分校に来る先生方に注意されまくってたし。香代子だってひかると一緒に迷った迷惑かけたでしょ。
香代子　言われてみれば…。
ひかる　面目ない。
香代子　でも、そうなるなら紀子だって。
紀子　何よ。

綾子 紀子は、なかなか打ち解けなかったからね。中学からこっち来たってのもあるけど。

ひかる でも、それは体のこともあったから、しょうがないんじゃない。

綾子 亜希子先生もそれは承知でじっくりと付き合ったの。迷惑かけたってことじゃ同じだから、三人とも同罪です。

ひかる そんなー。

香代子 でも、しょうがないでしょ。

紀子 ……

香代子 どうしたの、黙りこんじゃって。

紀子 いや、何でも。

そこへあわてた様子の木下が入ってくる。

木下 先生、まだお見えじゃありませんか？

香代子 見ての通りです。

木下 そうですか。

綾子 何かありました？

木下 いや、ちよっと。

ひかる ちよっとって。

香代子 あやしーい。

綾子 また、あんたたちは。(木下に) すいません。

木下 いや、いいんです。…どれくらい遅れそうですかね？

綾子 30分くらいって連絡入ったから、もうそろそろ着くと思うんですけど。

木下 そうですか。カメラももうスタンバっているからこちらの準備も大体できてるんですが…。

ひかる 大体って？

香代子 気になるんですけどー。

綾子 こら、二人とも。すいません。

木下 いいえ、固定のカメラで撮る方は問題ないんだけど、ハンディで撮るカメラの充電を忘れてて…。

綾子 何か問題でも？

木下 式の直前みんなの様子とか、自由に動いて撮ろうとすると、バッテリーが足んないかも。

紀子 え？

ひかる そんなー。

木下　もう少し遅れてもらうと、ちょっと助かるかな…なんてね。
ひかる　それ、都合よすぎです。
紀子　じゃ、ドキュメンタリーってのは？　大丈夫なんですか？
香代子　私の全国デビューは？
木下　メインのカメラがあるから、安心して。ハンディは充電をしながら撮影して
いくから。
綾子　本当、わがままばかり言ってますいけません。

どこからともなく、服部さんが登場。

服部　バッテリーがどうかしましたか？
木下　え？　いや、充電を忘れてて。…それが何か？
服部　あのビデオカメラのバッテリーなら、私が持っています。
木下　あんな業務用があるんですか？
服部　ええ。
木下　本当ですか？　助かります。
服部　どうぞ、こちらです。
木下　ありがとうございます。じゃ、もう一度機材の点検があるんで。
綾子　よろしく願います。
木下　はい。

木下と服部が教室を出て行く。

綾子　なんで、そんなバッテリー持ってるんだろ？
ひかる　服部さんて、ホント不思議。
香代子　やれやれ。新米ディレクターはあれだから。
綾子　あんた、ずいぶん偉いんじゃない？
紀子　でも何か、不安ね。
ひかる　紀子、昨日から楽しみにしてたもんね。
香代子　そうそう。
綾子　そうなんだ？
ひかる　DVDくれませんか、なんて言う紀子、初めて見たもんね。
綾子　へえ。
紀子　だって、私たち、みんな違う高校行くし。
香代子　そうか。そうだよね。

ひかる 一緒に何かすること、もうないかしんないしね。

紀子 だから、今のこの時間を少しでも何かにつて。

香代子 アルバムじゃダメなの？

紀子 写真は動かないでしょ。

ひかる 当たり前じゃん。

香代子 だからDVD？

紀子 うん。

綾子 外の人が撮るから先生方も入るだろうし。

紀子 ええ。

香代子 そうか。納得。

ひかる 私たちももらえるように頼もうか？

香代子 そうだね。

綾子 いいわね。そうやって残るのって。私が中学生の頃はそんなのなかったし。

ひかる そうですよー。

綾子 でも、無理強いしちゃダメよ。さっきだって木下さんに結構プレッシャーかけてたじゃない。

香代子 だって、デビューがかかっているし。

ひかる そんなことないから。

綾子 亜希子先生も、三年間よくあんなたちの面倒見たわ。

香代子 どういう意味ですかあ？

ひかる それが先生の仕事じゃないですか。

綾子 さっきも言ったでしょ。三人がそれぞれ、先生にはお世話になっているんだから。迷惑かけたってことは同じ。

香代子 それはまあ。

紀子 しょうがないよね。

綾子 大体、私だってあんなたちのせいで、さっきの5分間で三回も木下さんに「すいません」で言ったんだからね。

ひかる 数えてたんだ。

香代子 びっくりだ。

綾子 私は人に頭下げんのが嫌いな。…今までだって、亜希子先生があんなたちの代わりに頭下げてたんだから。

ひかる そう言われると…。

紀子 つらいよね。

綾子 だから、遅刻しちゃった亜希子先生を許してやってほしいってわけだ。

紀子 わかりました。

ひかる そうだね。
香代子 一つ大人になった私たちを見せてあげるってことで。
綾子 調子に乗っちゃって。(笑い)

亜希子先生が教室に駆け込んで来る。

亜希子 ごめん！ 遅くなったあ！
綾子 やっと来た。
香代子 先生、おそーい。
ひかる こんな大事な日にどうしたんですか？
亜希子 (息を切らせて) 面目ない！
紀子 先生、大丈夫？
亜希子 ああ、大丈夫。
綾子 じゃ、亜希子先生、後はよろしく。
亜希子 北川先生、ありがとう。この埋め合わせは…。
綾子 いいってことよ。長い付き合いでしょ。(と、出て行く)
亜希子 ありがとう。さて、
ひかる 先生、ホントどうしたんですか。
亜希子 いや、昨日ちょっと考え事したら、夜遅くなっちゃって。
香代子 三年間の思い出に浸っていたとか。
亜希子 まあ、そんなとこ。
紀子 先生、それはまだ早いですよ。
亜希子 え？
紀子 最後の今日一日が残ってるんですから。
ひかる そうよねー。
香代子 そうそう。
亜希子 そうか、そうだよね。

木下がやって来る。

木下 おはようございます、先生。
亜希子 おはようございます。木下さんにもご迷惑おかけして。
木下 いいんですよ。おかげで助かりました。
亜希子 はい？
木下 いえいえ、こっちの都合です。

三人 (笑う)

亜希子 え、何なに？

木下 何でもありません。どうぞご心配なく。

亜希子 そうですか？ じゃ、遅刻した分を取り戻さなきゃならないので。

木下 ええ、どうぞ。もうカメラはスタンバイしてるので。この教室の様子から撮影していいですか。

亜希子 どうぞ。

木下 では、いきまーす。(と外に合図を送って教室を出て行く)

亜希子 (気を取り直して三人に) 今日は卒業式と閉校式です。ちょっと長くなるけど、最後まで気を抜かないで頑張ってるね。

三人 はい。

亜希子 紀子、昨日みたいに具合が悪くなったら、我慢しないで北川先生に言うのよ。

紀子 はい。

亜希子 ひかると香代子はいつもどおり元気よくな。

ひかる・香代子 はい。

BGMがかかる。

亜希子 あれ、もうCDかけてる。

ひかる ちょっと早いんじゃない？

亜希子 校長先生、せっかちだから。

香代子 先生がそんなこと言っていていいんですか？

亜希子 最後だから。

ひかる ええ？ いいの？

亜希子 さ、体育館に行きましょう。

三人 ハイ。

ひかると香代子が教室を出て行く。

紀子 先生、昨日言ったこと…。

亜希子 いいのよ。

紀子 え？

亜希子 いいの。こういう時はいろんなことを思うんだから。

ひかるが戻ってくる。

ひかる 先生、みんな待ってますよ！
亜希子 ハイ。今行くわよ。(紀子に)行きましょう。
紀子 はい。

亜希子先生と紀子が教室を出て行く。
場転明かり。

5

紀子、ひかる、香代子が教室に戻ってくる。ひかるが泣いている。
帰り支度をして教室を去っていく三人。教室から三人の荷物がなくなる。
明かりがつくと卒業式の後の教室。
亜希子先生と綾子先生と木下がいる。

木下 行っちゃいますね。

綾子 そうね。

木下 でも、面白いもんですね。

綾子 何が？

木下 一番強気なひかるちゃんがあんなに泣くなんて。

亜希子 そういうものですよ。

綾子 そうよね。

木下 そうですか？

亜希子 気の強そうな子ほど、泣くんですよ。それだけ思い入れが強いんじゃないかな。

綾子 中学や高校の卒業式、そうじゃなかった？ 意外な子が泣いてなかった？

木下 そう言われてみれば…。

綾子 でしょう。

窓の外を眺める三人。

木下 もうあんな遠くへ。

綾子 まだ三人一緒だね。

亜希子 別れるのはあの坂を上がって降りてから。

綾子 ここからは見えないんだよね。

木下 何か、今も卒業式みたいですね。

亜希子　そうですね。…私たちにできるのは、出口まで見守ってあげるだけ。
木下　いい卒業式でした。

亜希子　え？

木下　いい卒業式だったと思います。

綾子　どこが？

木下　あの三人の親御さんたちだけじゃなく、親戚の方、地域の人たちもたくさん集まってくれて。

木下　本当にね。あんなに集まるなんて思わなかったわ。

綾子　この辺にあんなに人がいたんだって感じ。

木下　だから、やっぱりこの地域にはこの学校が必要だったって思うんです。

亜希子　この人たちはね。私たちとは違う。

木下　え？

亜希子　木下さんのいうことはその通りだと思います。

木下　なら、どうして？

亜希子　私たちは、この学校だから、あの学校だからって言えないんです。

木下　…。

亜希子　だから、私は次の学校の紀子やひかるや香代子に私のできることをします。

木下　…強いんですね。

亜希子　そんなことはありません。

木下　それで、三輪先生のできることで…。

亜希子　（きっぱりと）そばにいる。

木下　え？

亜希子　昨日紀子と話して思ったんですけど、結局そばにいてってことしかできなかつたような気がするんです、私。

木下　そうなんですか？

亜希子　だから、次の学校でもそこから始めようと思って。

綾子　あんたらしいよ。

木下　そうですか。（外を見て）あー、見えなくなっちゃいましたね。

亜希子　そうね。

木下　でもカメラには頼んであるから、大丈夫かな。

綾子　カメラマンさん、一緒に歩いてなかったけど。

木下　いやいや、あの子たちの後姿を見えなくなるまで追っついてって。

綾子　なるほど。学校を去っていく三人の後姿か。…いい絵になりそう。

木下　はい。

亜希子　（木下に）本当、今日はありがとうございました。

木下　いえ。こちらこそお邪魔だったんじゃないかって。

亜希子　そんなことありませんよ。(綾子に) ねえ。

綾子　そうそう。

木下　放送が終わったなら、先生方にもDVD、差し上げます。

亜希子　ありがとうございます。

綾子　楽しみにしてる。

木下　では、私たちはこれで。

亜希子　ありがとうございます。

木下　失礼します。

木下、教室を出て行く。

綾子　あの人、一生懸命だったね。

亜希子　そうね。

綾子　あれが若さってもんかねえ。

亜希子　何、年寄りくさい口利いてんの。

綾子　さっき、何かいいこと言ってたじゃん。「そばにいることからはじめたい」とか何とか。

亜希子　ああ、ちょっと照れくさかったけどね。

綾子　あんたららしいよ。

亜希子　さっきも聞いた。

綾子　憶えてたか。

間。

綾子　昨日紀子に何て言ったの？

亜希子　こだわるね。

綾子　だって、気になるしねえ。

亜希子　木下さんにも言ったこと。

綾子　ふーん。

亜希子　あの子には、形だけの言葉だったかもしれない。でも、そうとしか言えなかった。

綾子　正直だね。

亜希子　え？

綾子　言葉が形だけだったとか、隠さないもんね、亜希子。

亜希子 そうかな？ 買い被りじゃない？
綾子 そんなことないよ。

間。

綾子 あのさあ。

亜希子 今度は何？

綾子 最後のあいさつでさ。

亜希子 え？

綾子 あの子たちに「また明日ね」って言いそうじゃなかった？

亜希子 わかった？

綾子 まあね。

亜希子 最後の挨拶してて「明日はないんだな」って思ったから、かえって言いたく
なっただけだ。

綾子 どうして言わなかったの。

亜希子 言おうと思ったとたんに、カメラが目に入っちゃってさ。

綾子 それでやめちゃったの？

亜希子 そう。

綾子 言えばよかったのに。

亜希子 そうかな？

綾子 そうだよ。

窓の外を眺める二人。

綾子 ねえ？ どこって言われた？ 次の学校？

亜希子 市内に入りそう。：あんたは？

綾子 私は、まだどっかの分校かな？

亜希子 そう、お別れだね。

綾子 しょうがないさ。

亜希子 転勤の準備、しなきゃね。

綾子 そうだった。忘れてた。

亜希子 昨日、自分で言ってたでしょ。

綾子 そうだった？

亜希子 そうだよ。

綾子 どうにかなるさ。

亜希子 どうにか、ねえ。

綾子 私を信じなさい。

亜希子 私がここ来た時もそんなこと言っていなかった？。

二人、笑う。

間。

外を眺める二人。

亜希子 あれ、あの子たち……。戻ってきた。

綾子 手、振ってる。

遠くの紀子・ひかる・香代子に手を振る二人。

そのうちに手をおろして外を眺める二人。

綾子 いい学校だったね。

亜希子 うん。いい学校だった。

音楽。暗転。

おしまい